

移民たちの「声」を書きとめる試み

タイトル(その他言語)	Die stimme der migranten aufschreiben
著者	濱崎 桂子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	56
号	6
ページ	11-25
発行年	2005-11-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000961/

移民たちの「声」を書きとめる試み

浜 崎 桂 子

0. はじめに

1990年後半、ドイツのメディアでは、「カナークの言葉」という現象が一定の注目を集めた。この概念は、男性ジャーナリストで作家のフェリドゥン・ザイモグル（Feridun Zaimoglu）の仕事をきっかけに、よく聞かれるようになったものである。1964年トルコに生まれ、いわゆる「外国人労働者」の子供としてドイツで育ったザイモグルは、北部の都市キールで、トルコ系作家の文学雑誌を編集するなどの活動をしていたが、1995年にこの『カナークの言葉』¹と題した本を出版し、一躍注目を浴びる存在となった。

「カナーク」（Kanake）という言葉は、本来問題の多い概念である。19世紀半ばから使用が確認されているが、²特に1970年代以降は、「外国人」特に「外国人労働者」——外見によってそれと規定され、また社会的階層の低いグループ——に対する侮蔑の言葉として用いられている。ザイモグルがめざしたのは、今日「カナーク」と呼ばれるトルコ系移民の若者たちが、この否定的な概念を戦略的に自ら名乗り、この言葉の意味を転覆させること

1 Zaimoglu, Feridun: Kanak Sprak. 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft. Hamburg (Rotbuch), 1995.

2 本来は、サンドイッチ諸島の住民を指す言葉であったとされる。教養やマナーにかけた、粗野な（主に外国人）男性に対する侮蔑の言葉として、1850年ころから使用されていたといわれる。1974年ころから、「外国人労働者」に対して使われるようになった。Vgl. den Art. "Kanake" In: Küpper, Heinz: Wörterbuch der deutschen Umgangssprache. Stuttgart, München, Düsseldorf, Leipzig (Klett), 1997, S. 392.

であった。移民三世、四世にあたるトルコ系の若者たち、その中でも特に、教育や就業のシステムの外側にいる者たちが、マジョリティとは違うアイデンティティ、正しいドイツ語とは異なる言語を、彼ら独自のスタイルとして発信する場を作ろうとしたのが、このザイモグルの仕事である。

『社会の周縁の24の雑音』というサブタイトルを持つこの本には、13歳から35歳までの24人のトルコ系男性移民たちの言葉が収録されている。24のテキストは、それぞれのモノログとなっており、その物語を提供した人物のファーストネームと年齢、そして自称の職業が冒頭に示されている。「自動車整備工」、「ごみ収集業」、「ラッパー」、「社会学者」、「詩人」、「ジャンキー」、「ブレイカー」、「ジゴロ」、あるいは「性転換者」や「イスラム主義者」と自己規定するトルコ系移民の若者たちが、スラングを多用した言葉で、彼らのストーリーを語っている。

ザイモグルは、序文において「カナーケを素顔のままで描写すること」がこの本の意図であると述べている。この本では、移民知識人ではなく「カナーケだけが言葉を発している³」とザイモグルは強調しているが、彼ら自身の真正な言葉を、ザイモグルはどのようにテキストにしたのだろうか。本論では、『カナーケの言葉』に収録されたテキストが、どのように真正さを保っているのか、また、どのように受け止められているのか検証を行いたい。

1. 「カナーケ」の反響

催しのあと、人々が、ジェラシーの輪で彼を取り囲む。トルコ語で自分のことを語れないやつが、この中に入ることはできない。ドイツの傭兵からすれば、侵略してきた邪魔者の言葉、それがここでは、最高にセクシーなのだ。ほかのところだったら英語がそうであるように、ここではトルコ語こそが解放の言葉になってい

3 Zaimoglu: Kanak Sprak. S.18.

る。(……)⁴

ザイモグルが行った『カナーケの言葉』の朗読会について、作家ジャマル・トゥシック (Jamal Tuschick) は、上のように賞賛する。外部のドイツ社会と反対に、トルコ語ができないものがよそ者と感じるような聴衆が取り囲む、ザイモグルのパフォーマンス。トゥシックがここで描いているのは、カナーケたちの代弁者としてのザイモグルの姿である。通常、書店で行われる作家の朗読会を、ザイモグルはクラブや青少年センターでも行った。「舞台の上演のように」朗読し、「売春する少年」「イスラム主義者」といったカナーケたちの役柄に入り込み、自身それを楽しんだのだと述べている。⁵ 鋭い視線が印象的な風貌の彼自身のカリスマ性もあって、この「舞台のような」朗読会も話題となり、ザイモグルがメディアに登場する機会は急激に増えた。「トルコ人のマルコム X」「カナークスター」(Kanakstar) と異名を取ったザイモグルは、エスニックなサブカルチャーを好んで取り上げようとしたドイツのメディアの注目を集めた。さらにこの『カナーケの言葉』はラジオドラマとなり、CDとして出版され、1997年には、二冊目の『クズ——エルタン・オングンの本当の話』⁶ が、さらにその翌年には、「カナーカ」たち、すなわち女性のカナーケたちの言葉を集めた『スカーフ—社会の周縁からのカナーカの言葉』⁷ が出版された。二冊目のストーリーは、2000年に『カナーケの攻撃』⁸ というより刺激的なタイトルで映画化され、一連の「カナーケ」現象がより広く知られることとなる。

このカナーケ・シリーズについては、トルコ系移民の若者たちのスタイル

4 Tuschick, Jamal: Träger von Zukunftsinformationen. In: Hg. Tuschick, Jamal: Morgen Land. Neueste deutsche Literatur. Frankfurt am Main (Fischer), 2000, S. 283.

5 Persch, Patricia: "Identität ist Tofu für Lemminge" Interview mit dem Kieler Schriftsteller Feridun Zaimoglu. In: Der Deutschunterricht. 5/2004, S. 87-89. Hier S. 88.

6 Zaimoglu, Feridun: Abschaum. Die wahre Geschichte von Ertan Ongun. Hamburg (Rotbuch), 1997.

7 Zaimoglu, Feridun: Koppstoff. Kanaka Sprak vom Rande der Gesellschaft. Hamburg (Rotbuch), 1998.

8 Kanak Attack. Regie: Lars Becker. 2000.

を、北米のラップやヒップホップの文化のようにクールなっこよいスタイルとして表現し、ドイツのメディアにおけるトルコ系の若者文化の存在感を大きくした、という肯定的な評価がある一方で、暴力、麻薬、窃盗、グループ間抗争などが描かれた映画『カナーケの攻撃』が、トルコ系移民の若者は犯罪者予備軍であるというステレオタイプを作り、移民の若者たち自身のアイデンティティを崩した、という批判も受けた。

ザイモグルは、一連のカナーケの仕事は「芸術」であり、聴衆の反応や批判を意識して製作したものではない、とこれらの批判をかわしながら、一方では、自分の仕事を「広報活動」と位置づけてもいる。これまでメディアに登場しなかったカナーケの文化を「広報」すること（“Öffentlichkeitsarbeit”）は、あたらしい「公共性」（“Öffentlichkeit”）を作ることなのだと、その政治的な意図も表明している。いわく、この広報活動で彼が達成しようとしているのは、第一に、ドイツで生活しているマイノリティたちの「攻撃能力」を高めること、第二にドイツ人の若者たちの関心を勝ち得ること、第三に文化的な覇権を、新中道や右派から左派のものに取り返すこと。そのためには、多数派の「攻撃」を甘んじて受けるのではなく、反撃していく必要があると主張している。⁹ ザイモグル自ら脚本を書いた映画のタイトルが、挑発的に『カナーケの攻撃』となっていることも、彼の政治的戦略の表現なのである。

「カナーケの素顔を描こうとした」という一連のテキストが、同時にザイモグルの政治的戦略の表現手段でもあるとするならば、この『カナーケの言葉』は、ザイモグルの「作品」なのだろうか。それとも、カナーケたちの言葉を集めたルポルタージュ、あるいはエスノグラフィーなのだろうか。¹⁰

9 Zaimoglu, Feridun: “Verzweiflung ist Dynamit! Interview mit dem Kieler Autor Feridun Zaimoglu.” In: LinX. Nr.6 1999. <http://www.nadir.org/nadirZperiodika/linx/linx-6-99/feri.html> (最終アクセス2005年10月23日)

10 ドイツの出版の慣例では、フィクションのテキストの場合、「小説」「物語」「詩」というように、テキストのジャンルが必ず本の表紙およびタイトルページに記載されている。ザイモグルの上記3冊の「カナーケ」についての本には、その記載がない。すなわち、読者は、基本的には、この本をノンフィクションとして手にとることになる。

2. 「外国人労働者」を代弁するテキスト

ザイモグルのテキストについて考えるために、ドイツでこれまで出版された、「外国人」についてのテキストのジャンルを考察してみたい。ザイモグルが行ったような「広報活動」の試み、すなわち「外国人」や「移民」の生活や文化の実情を表現しようという試みは、1970年代から見られる。その中でも、特に影響力を持った二つのテキストを見てみよう。

1985年にドイツで出版された後、日本でも2年後に翻訳されたギュンター・ヴァルラフのルポルタージュ、『最底辺——トルコ人に変身してみた祖国・西ドイツ』¹¹が、おそらくこの分野ではドイツの国内外でもっとも有名なテキストであろう。著者ヴァルラフは、この『最底辺』以前にも、大衆紙『ビルト』の編集部にもぐりこみ、記事が捏造される過程を暴く取材を行い、その潜入ルポルタージュの手法で名が知られたジャーナリストであった。¹²同じ手法で取材された『最底辺』では、カラーコンタクトレンズとかつらで「トルコ人アリ」に変身したヴァルラフが、労働基準法を無視した劣悪な条件で外国人の不法労働者を使い捨てる企業の実情を暴いた、体を張ったルポルタージュである。十分な安全対策なしに危険な作業をさせる鉄鋼会社、契約どおりに賃金を払わない人材あっせん会社、また、危険な医療実験を行う製薬会社などの実情を体験しながら報告するヴァルラフのテキストには、「アリ」の同僚となった外国人労働者の状況も書き留められている。しかし、企業の不法雇用を暴くという目的、同僚たちにも身分を明かさないという事情もあり、テキストの前景にあるのは、ドイツ人雇用者たち、また外国人の同僚を徹底的に邪魔者扱いし罵倒するドイツ人労働者たちの姿である。社会の最底辺で酷使される外国人労働者の状況を暴露したルポルタージュとして重要な

11 ギュンター・ヴァルラフ『最底辺——トルコ人に変身してみた祖国・西ドイツ』（マサコ・シェーンエック訳）岩波書店、1987年。Wallraff, Günter: Ganz unten. Köln (Kiepenheuer & Witsch) 1985.

12 Vgl. Wallraff, Günter: Der Aufmacher. Der Mann, der bei "Bild" Hans Esser war. Köln (Kiepenheuer & Witsch) 1997.

テキストであることに疑いはないが、ここには、現実の労働移民たちの姿や声は現れていない。

もうひとつの外国人労働者についてのテキスト、『約束の地での生活ードイツの外国人¹³』は、労働運動とコミットしながら発信する作家たちのグループ「ドルトムント61¹⁴」の設立者の一人でもあるフォン・デア・グリューンが、1975年に出版したものである。ヴァルラフのルポルタージュとは違い、フォン・デア・グリューンはドイツに住む外国人労働者をたずね、彼らの生活や仕事についてインタビューをし、それを編集するというスタイルをとっている。6つの章は、それぞれ、「トルコ人男性」「ギリシャ人男性」「フランス人女性」というように、インタビューした人物の国籍を表題としている。たとえば、「トルコ人」のテキストは次のように、インタビューを受けた人物のモノローグで始まる。

このドイツの寒さで、私は病気になりそうだ。いまでもまだホームシックに苦しんでいるよ。むしろ、今のほうが、5年前よりもひどいくらいだ。ホームシックというのはひとつの病気だし、この病気はトルコでしか治せない。だが、アナトリアに帰ってみたところで仕事はない。稼ぎもない。いつか暮らし向きを良くして、人間らしく生活する可能性もない。¹⁵

一人称で語られる、まさに独り言のようなテキストには、著者フォン・デア・グリューンの解説が挿入される。

13 Von der Grün, Max: Leben im gelobten Land. Ausländer in Deutschland. Darmstadt und Neuwied. 1975. マックス・フォン・デア・グリューン『西ドイツ社会の繁栄の陰で：外国人労働者の役割と実態』（田口知弘訳）風媒社、1982年。ただし、本文中では書名をドイツ語の原題どおりに訳した。

14 フォン・デア・グリューンのほか、フリッツ・ヒューザー（Fritz Hüser）などが中心になり、1961年にドルトムントで結成された。

15 Von der Grün, Max: Leben im gelobten Land. S.11.

オスマン・ギェルリュクは、妻と三歳の娘イペクと一緒に、ドルトムントの北部にある、一間半の住居に暮らしている。ほとんどトルコ人だけが住んでいる地域で、ドイツ人たちは、ここを「トルコ人区域」¹⁶と呼んでいる。

ほぼすべてのテキストを通じて、インタビューされた者のモノローグと著者の解説が一段落ごとに交互に書かれており、読者は、外国人労働者の「真正な」言葉と、その状況についての著者の解説、批判的なコメントを同時進行で読んでいくことになる。それぞれの人物の経歴、ドイツでの生活、彼らの周囲の社会的状況が、著者とインフォーマント両者の視点から、立体的に描写されている。著者自身は、この著作をドイツに在住する外国人の「生活像」(Lebensbild)であり、「ポートレート」だとしている。調査のために、2万キロのドライブをして成立したというこのテキストは、社会批判的な意図を持ったエスノグラフィーとしても解釈することができる。

このフォン・デア・グリューンのテキストとほぼ同じ頃、外国人労働者たちの間で、彼ら自身の声を詩や散文の形で書きとめる活動も始まっていた。シリア出身のラフィク・シャミ (Rafik Schami)、イタリア出身のフランコ・ビオンディ (Franco Biondi) らは、「南風 外国人労働者のドイツ語」(südwind gastarbeiterdeutsch) というグループ名で、外国人作家の作品を、より広範な読者に向けて発表する活動を行った。彼らが出版した雑誌、アンソロジー¹⁷には、トルコ、イタリア、ギリシャ、ユーゴスラビアなどからの移民たちが多く作品を寄稿しているが、故国ですでに作家として活動していたシャミのように、厳密な意味で労働移民ではない作家たちも少なくない。しかし、「外国人労働者作家」と名乗り、自分の執筆活動を「ドイツ社会への

16 ebd.

17 詳細については、以下に詳しい。

Tantow, Lutz: In den Hinterhöfen der deutschen Sprache — Ein Streifzug durch die deutsche Literatur von Ausländern. In: "Zeit" 6. April 1984.

提案」と位置づけていたシャミは、自ら「外国人労働者」と一体化し、彼らの声を代弁しようとしたのである。

ザイモグルが、「カナーク」という概念の意味を肯定的に書きかえようとしたのと同じように、シャミたちは「外国人労働者」という概念に、積極的な意味を与えることを試みた。『当事者の文学』(Literatur der Betroffenheit)¹⁸と題された綱領の中では、「すべての当事者たち(“Betroffene”)が共に行動することによってのみ、困惑(“Betroffenheit”)の理由を除去することができる」と、彼らの文学の目標を宣言している。シャミたちは、文化的差異をのりこえ、文学作品という媒体をとおして共に手をとることで、「外国人労働者の置かれている状況が明らかになる。それから解決策が発見できるのだ」とさまざまな出自を持った作家たちに呼びかけていた。彼らが編集したアンソロジーには、このような政治的アピールと、個々の作家たちのテキストが掲載され、「外国人労働者文学」というひとつのジャンルを構成したのである。

3. 「声」を書きとめるということ

前章でみたように、70年代から80年代にかけて、「外国人労働者」、あるいは「外国人」の存在を、マジョリティ社会の言説に取り込んでいこうとする試みは、ルポルタージュやエスノグラフィー、あるいは、メッセージ性の強い文学作品とそれを裏書する政治的アピールという形式をとって行われてきた。

これらのテキストに共通するのは、公式の言説、マスメディアにアクセスする手段を持たなかったマイノリティたちを代弁しようとする、著者たちの

18 Biondi, Franco / Schami, Rafik unter Mitarbeit von Naoum, Jusuf und Taufiq, Sulemann: Literatur der Betroffenheit. Bemerkungen zur Gastarbeiterliteratur. In: Schaffernicht, Christian (Hg.): Zuhause in der Fremde. Ein Bundesdeutsches Lesebuch. Fischerhude (Verlag Atelier im Bauernhaus) 1981, S.124-136.

意図である。社会の周縁にある移民労働者たちの声は、誰かが特別な注意を向けて聞き取り、代弁することなしには伝達されない言葉とされている。このような、周縁の言葉を伝達する試みを、ここでは暫定的に「声を書きとめる試み」と名づけたい。

「声を書きとめる」という表現には、オングが指摘した、「声の文化」と「文字の文化」、それぞれの特徴が示されているといえるだろう。¹⁹ オングによれば、「文字の文化」では、言葉が人間の身体の範囲、発話者の場所と時間を越えて伝達され、発話の場のコンテクストを越えた大きな集団に情報が共有されるようになる。その結果、言説は普遍性、抽象性を獲得する。一方、「声の文化」において、発話の真正性を保証していた話し手と聞き手との同時性、そこで共有される感覚性や直接性は、「文字の文化」の発展のなかで、主観的なもの、すなわち普遍性のないものとされて意義を失っていく。代弁されなければ伝達されえない「声」とは、「文字の裏書のない「声」」のことであり、これは文字の文化では「もっとも信用できない証言とみなされるようになった」²⁰ものである。おそらく、「移民の声を書きとめる」ことの目的は、彼らの言葉を「文字で裏書する」ことによって、より多くの受け手に伝達可能にすること、ということができる。

移民たちの言葉を文字に書きとめ、マジョリティに伝達しようとする際、とりわけ移民一世の言葉については、文字通り「言葉を置き換える」、すなわち「翻訳」する作業が伴うはずである。ギュンター・ヴァルラフが「外国人なまりのドイツ語」を使って、「アリ」への変身を説得力を持つものに仕上げたように、成人してから労働移民としてドイツにやってきた外国人たち、ドイツ語を正確に習得する機会を持たなかった彼らの言葉は、マジョリティ社会のそれとは異なる「ドイツ語」であった。ヴァルラフが演じた「アリ」

19 ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』（桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳）藤原書店、1991年。

20 工藤進『声——記号に取り残されたもの』白水社、1998年、80ページ。

は、ドイツ語の動詞を人称変化させずに不定詞のまま用い、また、語の配置を入れかえて「外国人なまりのドイツ語」を作り出した。ヴァルラフ自身がコメントしているように、彼の「ドイツ語」は実際にトルコ人労働者が使うドイツ語とは違うものであったが、²¹ そもそもトルコ人の労働者の言葉を注意深く聞いていないドイツ人雇用者の耳には、十分な「外国人なまりのドイツ語」であったわけである。

一方、フォン・デア・グリューンが編集したインタビューでは、いわゆる「外国人なまり」はきれいに消えている。テキストとなった外国人のモノローグは、話し言葉として、すなわち「声」を文字化したものとして書かれているが、マジョリティである読み手の言葉、すなわち標準ドイツ語に「翻訳」されているのである。それに加えて、モノローグの合間に解説を書き込んだフォン・デア・グリューンのテキストは、インタビューという素材を、読者が理解できる言葉に置き換え、「文字化」したものであるといえる。

それでは、トルコ系移民の若者たちを「代弁」したザイモグルのテキストは、彼らの声を、どのように「文字化」しているのだろうか。

4. ザイモグルによるエスノグラフィー

カナークの言葉を集めるプロセスについて、ザイモグルは、スラングを多用した序文の中で次のように説明している。彼は、トルコ系の若者がたむろする地域を、一年半の時間をかけ「探偵のように」調査した。²² 一冊目のための取材で調査の相手を男性にしぼったのは、「このゲッターで活動しているのは主に男たち」で、そこから除外されている女性たちとコンタクトを取ることは、「ゲッターのよそもの」には難しかったからである。つまり、ザイモグルは「ゲッターの仲間」としてではなく「よそもの」としてカナークた

21 ヴァルラフ『最底辺』2, 3 ページ。

22 Zaimoglu: Kanak Sprak. S.15.

ちと接触した。その際、「大学まで行ったやつ」、つまり、ドイツ社会に、あるいはそもそも市民社会にある程度の適応が可能だった者に対する不信感を取り除くことは簡単ではなかったとも述べている。

ザイモグルの手続きを見ると、このインタビューは、オーラル・ヒストリーやエスノグラフィーの手法を用い、非常に慎重に行われていることがわかる。まず、時間をかけて相手との間に信頼を築き、必要な場合はしかるべき紹介者を通してインフォーマントとの接触を取ったのち、「カナークとしてドイツで生活するとはどういうことか？」というひとつの質問だけをし、あとは相手に語らせるという方法をとったという。これは、インタビュアーが質問によって対話を支配することを避け、インフォーマントに自由に語らせる「ナラティブを通してのインタビュー」²³の手法である。インタビューはテープに録音され、状況が許されればその場でメモを取ったという。

この本に収録されているテキストには、ザイモグルの質問や言葉は現れず、一貫してインフォーマントのモノログの形となっている。彼らがインタビュアーに向けて言ったのであろう呼びかけ、“Bruder”（アニキ）あるいは“Kumpel”（相棒）という語がしばしば挟まれていることで、その存在が推測できる程度である。しかし、ザイモグルが最初の質問以外、全く言葉を発しなかったと考えるのは不自然だろう。実際には、途中であいづちを打ち、次の発言を促すといった対話が行われたはずである。

しかし、序文をのぞいて、テキストからインタビュアーの姿はきれいに消えており、我々はカナークたちの言葉をあたかも直接受け取っているように、読み、聞くことになる。また、フォン・デア・グリューンの場合に見られたように、語っている人物についての情報や、彼らの生活の状況についての解説もまったく見られない。読者は、語っているカナークの声—それを文字化したもの—だけを読み、彼らを理解するという困難な試みを行うことになる

23 ポール・トンプソン『記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界』（酒井順子訳）青木書店、2002年、396ページ。

のである。このザイモグルの手法は、「この本では、カナークだけが言葉を発しているのだ」とする彼の意図を徹底的に実践したものといえる。

しかし、実際にカナークたちが語る言葉は、序文でも指摘されているように、本来、トルコ語とドイツ語、それもそれぞれのスラングと、さらに、英語のヒップホップの表現などが混交された、一種のピジン・クレオール語であるはずである。ところが、この本に収録されているテキストは、若者言葉や若者文化に精通していないものにとっては理解しがたいとはいえ、トルコ語の要素はそれほど多くみられない。すなわち、ここに文字化されているカナークの言葉は、彼らの完全な「生の言葉」ではなく、ザイモグルによってドイツ語に翻訳されたテキストなのである。

この翻訳の過程について、彼は次のように説明している。

この「翻案」においては、完結した、目にみえる、そして「真正」な言語のイメージを作ることを念頭においた。「移民文学」とは違い、ここでは、カナークたちが自分たちの舌で言葉を発しているのだ。完成した「翻訳」は、インタビューを受けたものたちにもう一度閲覧してもらるか、音読したものをチェックしてもらい、彼らの許可を得た。全員が出版の意図を了解している。3人の例を除いて、名前は仮名で、個人を特定できるような情報は削除した。インタビューを録音したテープは、彼らの強い要求で、彼らの目の前で削除した。(……)²⁴

ここでも再三、インタビュアーであり、翻訳者であり、編集者であるザイモグルによる「改竄」が行われていないことが強調される。さらに、翻訳と編集作業にあたっては、民族誌記述者としての介入を極力小さいものにするように心を配っている様子がうかがえる。

24 Zaimoglu, Feridun: Kanak Sprak. S.18.

一方、翻訳の際には、トルコ語の語彙を字義通りに訳すことで「美辞麗句のオリエンタルな言葉」²⁵と誤解されたり、「フォークロアのワナ」に陥ることのないよう、トルコ語独特の言い回しを、あえてドイツ語のごく普通な表現に意識をしたとも述べている。たとえば、「Bruder」（兄弟／アニキ）という相手への呼びかけは、もともと「göozum」（私の目）、「gözumün nuru」（私の目の光）というトルコ語の表現であったものを意識したのだという。²⁶

カナークの言葉の典型的な語彙に数えられるこの“Bruder”という呼びかけ²⁷だが、そもそもはザイモグルによる「翻訳」によって作られた言葉であったことがわかる。だとすれば、トルコ人移民たちの生の声は、彼らの存在をアピールしようとするザイモグルの意図によって、翻案され、「カナーク」独特の言葉と文体として新たに創造されたのだ、ということができるだろう。このザイモグルがとった方法は、文化人類学における異文化の記述をめぐる議論と問題を共有している。ある文化について、インフォーマントへのインタビューをしながら書き留めるという作業は、クリフォード・ギアツが指摘したように、ある文化を「解釈」という作業にほかならない。²⁸社会の周縁にある移民社会独自の文化、またある世代特定の文化について書きとめるということは、調査者の解釈に基づいて、彼らの社会的、文化的位置を固定する作業でもある。²⁹すなわち、ある文化についての言説を解釈する際には、

25 この表現で、おそらく、ザイモグルは、トルコ語の表現を字義通りドイツ語にすることで独特の文体で小説を書いたトルコ出身の女性作家エツダマ（Emine Sevgi Özdamar）を示唆しているのだろう。彼女の初期の小説について、ドイツの文芸欄は、主にこの「オリエンタルな表現」に注目したのである。なお、エツダマの最新作『奇妙な星が地上を眺める』（2003）では、このような表現は見られなくなっている。

26 Zaimoglu, Feridun: Kanak Sprak. S. 14.

27 カナークの言葉の言語学的特徴を分析している Moraldo による指摘。なお、Moraldo によれば、このドイツ語での Bruder という呼びかけは、北米のヒップホップ、あるいはアフリカン・アメリカンのサブカルチャーに見られる、“brother”という呼びかけの模倣である。Vgl. Moraldo, Sandro M: Kanak Sprak, The Linguistic Features of Turkish Migrants' Communicative Style in Feridun Zaimoglu's Works. In: ed. by Donna R. Miller and Monica Turci: Language and Verbal Art Revisited. Linguistic Approaches to the Literature Text. London, Equinox 2006. (in print).

28 クリフォード・ギアツ『文化の解釈学』（吉田禎吾他訳）岩波書店、1987年、14ページ。

29 ここでは詳述しないが、移民若者グループについては、社会学、あるいは社会言語学的関心からのエスノグラフィーも多く書かれている。社会学的アプローチによるエスノグラフィー

必然的に、誰が観察し、書きとめ、翻訳をするのか、いいかえれば誰の解釈による記述なのかと問わねばならない。ザイモグルによる『カナーケの言葉』は、注意深く真正性を目指したものであっても、あくまでもザイモグルのテキストなのである。

5. カナーケの「声」

先にも指摘したように、『カナーケの言葉』のモノローグは、インタビューする編者の言葉が注意深く削除されたことで、カナーケの声を直接受け取っているかのような直接性を帯びている。逆に言えば、このテキストが本来媒介されたものであるということが忘れられる危険性を持っている。このことは、「舞台のような朗読会」では、すなわち声によってこのテキストが伝達される場ではより強烈な形で起こった。朗読の際、それぞれの人物の役柄に入り込むことを楽しんだというザイモグルは、「だから、（朗読会の聴衆が）私のことを、トルコ人のマルコム X（……），といった印象を持ったのも、理由のないことではない³⁰」と述べている。「（彼は）本当に正真正銘のハードなカナーケだ」という印象を、ザイモグルは確かに聴衆に与えていたのだ。移民の若者たちの声を届けようとしたザイモグルは、グループ内のジャルゴンであった彼らの言葉を、まず『カナーケの言葉』の本という形で文字化し、さらに朗読会という場でその文字に再び彼の声を与え、カナーケの「声」の「直接性」、「同時性」を再現させたのである。

さらに、ラジオドラマ、CD、映画と、より多くの受け手にアクセスが可能なメディアによってカナーケの声が伝達されていったことで、必然的にそ

として、

Tertilt, Hermann: Turkish Power Boys. Ethnographie einer Jugendbande. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 1996.

社会言語学的調査として

Hinnenkamp, Volker: "Gemischt sprechen" von Migrantenjugendlichen als Ausdruck ihrer Identität. In: Der Deutschunterricht. 2000. Nr. 5. S. 96-107. など。

30 Persch, Patricia: Identität ist Tofu für Lemminge. S. 88.

の性質には変化が起こった。このような電子メディアによる「声」の伝達を、オングは「二次的な声の文化」と呼んでいる。この「二次的な声」は、もともと「声」が持っていた「直接性」、「同時性」を持つが、一方では、技術的に繰り返され、より多くの不特定多数の受け手に伝達される可能性を持つという意味で、「文字の文化」の刻印を受けてもいる。この二次的な声の文化は、「共有的な感覚をはぐくみ、現在の主観を重んじ、さらには決まり文句を用いさえする」³¹点で、まぎれもなく「声の文化」の特徴を持つが、この「共有的な感覚」「決まり文句の使用」が、「文字の文化」以上に大きな集団に共有されることになる。つまり、マスメディアによって伝えられた「カナーケの言葉」は、カナーケのコミュニティを超えて使用されることになるのである。まさに、これこそがザイモグルの「広報活動」の目的であったともいえるのだが、同時に広範囲な受け手に共有されるステレオタイプを生み出したことも否めない。

ザイモグルは、異文化の相互理解を謳った1980年代の「外国人労働者文学」は、「貧しいけれど心優しいトルコ人アリ」のステレオタイプを作り、涙を誘い、いわば保護政策の対象として読まれたのだと強烈に批判し、このステレオタイプをいわば崩すためにカナーケたちの言葉を集めた。しかし、同時に「犯罪に手を染めるカナーケ」というイメージは、80年代、印刷媒体で発行された「外国人労働者文学」とは比較にならない規模で、メディアによって増幅されることになったのである。一方で、ステレオタイプ化を引き起こした『カナーケの言葉』は、しかし他方では、確実に、カナーケの「声」を伝達する役割を果たした。彼らのジャルゴンだった言葉は、もともとの領域を広く超え、いまや彼らだけの「言葉」ではなくなりつつあるのだ。³²

31 オング『声の文化と文字の文化』279ページ。

32 映像メディアで用いられるいわゆる「トルコ人ドイツ語」が、必ずしも移民の若者たちのみでなく、ドイツ人の若者にも用いられ、また、映画などでもドイツ俳優がトルコ人移民を演じ、「トルコ人ドイツ語」を話す現象が見られる。メディアにおける「トルコ人ドイツ語」については、以下の分析に詳しい。

Androutsopoulos, Jannis: Ultra korrekt Alder! Zur Medialen Stilisierung und Aneignung von "Türkendeutsch". In: Deutsche Sprache. 29Jg. 2001. S. 321-339.